

沖縄八重山文化研究会会報

第 223 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三一六
TEL 〇九八―八八―二一五〇四三



第二二三回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇一一年五月十五日、県立芸大付属研究所内で開かれ、川平成雄氏が「著書を語る―『沖縄 空白の一年 1945―1946』が問いかけるもの」と題して発表しました。

川平氏は一九四九年、与那国島の出身。法政大学博士課程終了、現在は琉球大学の教授。専攻は沖縄社会経済史・島嶼経済論で主な著書論文に『沖縄・一九三〇年代前後の研究』（藤原書店、二〇〇四）、「沖縄戦終結はいつか」（『琉球大学経済研究』二〇〇七）などがある。本会でもこれまでに、一九九六年第六〇回「移輸出・移輸入からみた近代八重山の生産と生活」、二〇〇三年第一三八回「与那国島・その山がもつ意味」を発表している。

今回は、二〇一一年二月に吉川弘文館から刊行されたばかりの『沖縄 空白の一年 一九四五―一九四六』について著者自身が概要を説明した。氏は沖縄に米軍基地が残っている現状を、沖縄には「戦後」はない、と言い切る。

『沖縄 空白の一年 1945―1946』が問いかけるもの

川平 成雄

沖縄の「戦後」は、沖縄戦と米軍による占領・統治が同時に進行する中にはじまる。米軍は沖縄本島上陸後、住民を収容するとともに、いわゆる「ニミッツ」布告を発令して日本帝国政府のすべての行政権・司法権の停止を命じ、さらに金融機関の閉鎖、貨幣取引に関する一切の行為をも禁止する。米軍が沖縄を占領下において以降のおよそ一年間は、商品の売買、資金の支払い、金融など通貨に関するすべての経済事象が沖縄から姿を消してしまう。沖縄は一九四六年三月二五日の第一次通貨交換、五月一日の貸金制度の復活まで無償配給・無償労働・無通貨の時代が続く。この一年間は沖縄「戦後」の原点ともいうべき一年間であるが、研究はほとんどなされておらず、いわば「空白の一年」である。

まず、確認したいのは、「沖縄戦終結はいつか」である。これまでいくつかの説が出されているが、大切なのは、住民にとっての沖縄戦終結と日本軍にとっての沖縄戦終結を同じ次元で論じてはならないということである。住民にとっての沖縄戦終結は、捕われた日・収容された日であり、日本軍にとっての沖縄戦終結は、牛島司令官が自決した六月二三日でもなく、「玉音放送」が流れた八月一五日でもなく、降伏文書に調印した九月二日でもなく、南西諸島の日本守備軍と米軍が降伏調印した九月七日である。

米軍は上陸と同時に住民を収容、労働力を確保して飛行場の整備、基地建設を進め、この対価として食糧・衣類などの生活物資を配給する。米軍は統治の一環として住民に「ある程度」の自治を認め、「玉音放送」が流れた八月一五日に「仮沖縄諮議会」を設置、女性には、日本政治上、はじめて参政権を与える。収容された住民の中には、虚脱と放心状態にいるものもおれば、飢餓線から解放される喜びを実感するものもいた。また親を失い、兄弟姉妹を失い、親類を失い、天涯孤獨となった戦争孤児たちもいた。沖縄戦の只中であつても、生き残った教師たちは、青空教室を開き、ガリ版教科書を作り、子供たちの教育に取り組む。子供たちの喜びは、教師たち

にとつても喜びであつた。戦争で打ちひしがれていた人たちを救つたのは、三味線と踊りの「力」であつた。三味線と踊りには、絶望の淵から生き返させる「力」が秘められているのである。

沖縄戦は、沖縄の人たちの生産の場、生活の場をことごとく破壊した。沖縄の人たちの生活を支えたのが、米軍政府による食糧の配給であつた。米軍政府にとつても、米本国政府にとつても、この負担は大きく、早急に沖縄の復興を図る必要があつた。この帰結として生まれたのが、貨幣制度および賃金制度の復活であり、有償配給であつたのである。沖縄の人たちは、生きるがために一日一日が必死であつた。このことを象徴するのが、台湾、香港、日本との密貿易であり、闇市場の登場であつた。闇市場の主役は、夫を失い、子供たちを抱えて生きていかなければならない女性たちであつた。

四五年一〇月二三日、米軍政府は住民の収容所からの帰村を許可する。だが、宅地や耕作に適している土地は、日本軍によつて強制的に収用されていた土地であり、それを米軍は、基地建設のために困り込んでいたのである。このような悪条件の中でも住民は、復興への道を、一步一步、歩いていく。足懸りとなつたのは、漁業、畜産業、農業である。加えて米軍政府の基本方

針は、可能な限り、沖縄の資材ならびに労働力を利用することにあつた。なぜなら米本国政府の財政構造は、軍事費の驚くべき増加によつて、すでに破綻に近い状態にあつたからである。

ここで、昭和天皇の責任を問わなければならない。昭和天皇は、沖縄の「切り捨て」の決断を下し、沖縄の日本からの「切り離し」にも同意する。「切り捨て」は、昭和天皇の判断によつて「沖縄戦」を回避することができたにもかかわらず、「モウ一度戦果ヲ挙ゲテ」戦争終結後の条件を有利にするために沖縄を捨石にした「切り捨て」である。「切り離し」は、日本を共産圏から防衛してもらう見返りと戦後日本の復興を図る必要からの「切り離し」である。昭和天皇による沖縄の「切り捨て」と「切り離し」は、限りなく深く、そして重い。

「戦後」六六年というが、不発弾事故が起こり、この度ごとに沖縄の「おじい」「おばあ」たちの脳裏には、沖縄戦の恐怖が蘇り、錯乱状態に陥る。「おじい」「おばあ」たちにとつては、今なお沖縄戦が続いているのである。七〇年から八〇年にかけてとされる不発弾処理、四〇二五柱にもよる未収集の遺骨、日本にある米軍基地の七四・三パーセントの存在、この中のひとつでもある限り、沖縄に「戦後」はない。

文化短信

「平和への証言」展始まる 八重山平和祈念館

六月二十三日の「慰霊の日」にちなみ、戦争体験を身近に感じることによって戦争の悲惨さや平和の尊さを考えようと、八重山平和祈念館で、戦争体験を伝える企画展「後世へ語り継ぐ平和への証言」がこのほど始まった。

ビデオやパネル、実物資料などで戦争体験を伝えるもので、軍人や軍属として戦争を体験した人たちが、尖閣列島戦時遭難事件の体験者ら十三人の証言と戦争マラリアに関する四人の証言が展示されている。証言のビデオは体験者別に見られるようになっていて、証言者一人につき、二四分〜八五分間収録。実物資料としては、避難壕を掘るのに用いたつるはしなどの工具、背負ったまま戦車に突っ込むために作られた「箱爆雷」の復元品などを展示。戦後、極端なモノ不足を乗り越えるため、短くなった鉛筆に竹筒を継ぎ足して使っていた文房具の復元品も写真で展示している。展示は七月三日まで。

ハンセン病と八重山のかかわり 石垣と西表で現地視察

ハンセン病と八重山のかかわりを学ぶ現地視察がこのほど、石垣島と西表島で行われ、県内外から約五〇人が参加した。参加者は、戦前から終戦直後にかけて八重山の患者たちが療養施設の整備や入所の実現に向けて話し合った石垣市大川の民家や、宮古の元患者たちが入植を試みて断念した西表島古見の農地などを訪れ、差別にさらされてきた患者や元患者が八重山に残した足取りを確かめた。同調査はハンセン病の関係者らでつくるハンセン病市民学会が実施。宮古島市と名護市で総会と交流集会を開いたあと八重山を訪れたもの。

石垣市大川では、ハンセン病患者だった徳田祐弼が暮らした民家を訪問し、西表島古見では、一九六〇年代に宮古南静園の退所者たちが農業によって自活の道を目指したものの、断念した農地を訪問。八重山のハンセン病問題を考える会の大田静男代表が、ハンセン病患者の行動が厳しく制限されていた当時の状況や、患者三万人を収容する「西表瀬村計画」を日本政府が大正期に計画したあと、廃案になった経緯などの説明をおこなった。

伊原間 盛大に船越屋ハリー

石垣島の太平洋側から東シナ海側に船を担いで移動する独特の海神祭「船越屋（フナクヤ）ハリー」がこのほど伊原間の船越漁港で行われた。北部漁友会（林豊会長）の主催するもので今年で第一四回を数える。

同漁港は、石垣島の最もくびれた部分に位置し、太平洋側と東シナ海側までの距離はわずか約二〇メートル。「船越」は昔の海人が天候や風向きに合わせて両海岸を使い分け、その際には船を担いで移動したことに由来している。

伊原間地区では、昔の海人が行っていた船を担ぎ陸地を移動する「船越」を見ようと大勢の人出でにぎわった。この日は、同漁友会と伊原間中学校の生徒四三人が、勇壮に鳴り響くドラの音を先頭に、東の浜から西にある同漁港まで龍船を運び、会場から盛大な拍手を受けていた。続いて、オガンハリーや久松五勇士にちなんだ五勇士ハリーなどがあり、来場者も体験ハリーで快晴のユッカヌヒーを満喫していた。



新刊紹介

石垣市史考古ビジュアル版

『パナリ焼の誕生』

―パナリ期・現集落のはじまり―
王府支配下で独自に発達

石垣市史編集課では、二〇〇七年から「石垣市史考古ビジュアル版」をシリーズとして刊行しているが『パナリ焼の誕生』は、その七巻である。ちなみに第一巻は『研究史』、二巻『下田原期のくらし』、三巻『有土器から無土器へ』、四巻『無土器から有土器へ』、五巻『陶磁器から見た交流史』、六巻『八重山の民間交易隆盛期』で、本巻は最終巻である。

パナリ焼の土器が登場した時代は、オヤケアカハチの乱により八重山が琉球王府の支配下にはいつていった一七世紀の初めごろである。それ以前には一三世紀から一七世紀にかけて中国陶磁器が大量に出土した中森式土器の時代があり、琉球王府の支配で外との交易が規制され、八重山内部での土器の生産活動が促されたのである。パナリ焼という独自の土器を生みだし、集落もこの時期に現集落の原型が形成されたのである。

本巻ではそうしたパナリ焼の現物の写真や、集落の様子を古地図などで紹介している。本巻の編集者でもある金武正紀は「考古学からみたパナリ期の八重山」の中で、パナリ焼誕生の背景を、次のように書いている。

「中森式土器は主に煮炊き用の鍋を作っていたのに対して、パナリ焼は水を運ぶ壺や水を貯蔵する大型の壺・甕・鉢などが中心となる。パナリ期になると鍋は鉄鍋が普及し、土器は普及しなくなると考えられる。ところが、中森期には民間交易によって大量に入ってきた中国産の褐釉陶器壺がパナリ期になると入らなくなる。これまで褐釉陶器壺で水を運んだり、貯蔵したりしていたのが出来なくなり、その代用としてパナリ焼が登場したと考えられる」と分析している。

水の貯蔵用として使用されたとみられる胴部が脹らむ壺や底部が広くなった壺などを多数の写真で紹介している。また、パナリ期には、洗骨した人骨を納める蔵骨器も作られているが、これについて金武は、この時代に洗骨の風習が盛んになったが、蔵骨器を沖縄本島から取り寄せるには高価なため、地元で生産されるようになったのではないかと推測している。

点についても金武は、次のように分析している。

「八重山全体で大量に確認されたパナリ焼、墓荒しによって大量に島外に持ち出されたパナリ焼、そして現在でも古墓にねむっているパナリ焼、これらを考えると小さな新城島だけで作られたとは考えにくい。中森式土器が各島々で作られたように、パナリ焼も多くの島で作られたと考えられる」と述べ、「パナリ焼も土器であり、窯で焼くのではなく、野焼きである。土器づくりの技術を持つていた八重山の人々がパナリ焼をつくることは難しいことではなかったと考えられる」としている。

本書ではその実験的試みとして、嘉陽恵美子が野焼きによる「パナリ焼の復元」について報告している。また、石垣久雄が「古いうたに出てくるパナリ焼」として竹富島や、黒島につたわる「パナリ焼あゆり」を紹介し、その製作工程を解説している。時代はすでに近世期の歴史時代に突入しており、文献資料との照合も可能となり、パナリ期は身近で親しみやすい時代である。考古ビジュアル版を締めくくりにふさわしい時代である。それにつけても全七巻のシリーズは、豊かな八重山の考古学の世界を、私たちの前に提示してくれたと言えよう。
(石垣市、A4判、六七頁、定価七〇〇円)